

あらためてインクルッシブな教育

本県は、初任者研修で特別支援学校の訪問・見学を行っている。

学校の性格上、いつでも訪問できるものではない。しかし、授業や施設見学、学校の概要の説明等見聞できることはありがたいことである。

私も指導主事になって県立学校、特に特別支援学校の訪問が可能になり、新たな学びができた。大変有り難いことである。それ以上に初任者がじっくりと見学できることは大きな意義があると思われる。

前号でも書いたが、教育の基本は「植物を育て、動物を育て、特別な支援を必要としている子供を育てる」経験を持つことである。

1994年のサマランカ宣言は重要だ。

文化的・民族的マイノリティ、経済的なハンディキャップなどとともに障害児が対象にあげられ、特別な教育ニーズに対して個別に必要な教育を託すことの必要性が示されている。

(1)

学校教育において、もっと具体的にいうと、障害を持つ生徒、経済的に苦しい家庭の生徒、勉強が苦手な生徒、運動が苦手な生徒、などなど学級にいる様々な生徒を包摂（つつみこむこと）して育てることができるかが大切である。

さまざまな子供たちが、それぞれ個性を持っていて、我々教員を含めた大人がその個性を配慮し、彼ら彼女らが学びやすいようにしてあげることができるかである。

資金を確保し、ハード面を改善することはもちろん、それと伴に、指導者がいかに状況を受け入れ、対応する懐の大きさとゆとりを持つことができるかであろう。

ここに簡単に書いたが、毎日の忙しさで、想いを忘れてしまうこともある。しかし、教育へ対する理念というか哲学を持ち続けることができるかだと思う。難しい問題だが大切な問題である。

重要なことは先生一人ひとりの能力に頼らざるを得ないと思う。

がんばってほしい。

注(1) 学校の戦後史 木村 元 岩波新書 p148